慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マンハイム知識社会学の研究
Sub Title	
Author	澤井, 敦(Sawai, Atsushi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1994
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.40 (1994.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000040-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

博　士（平成6年度）

社会学博士

第　　号　澤井　敦

マンハイム知識社会学の研究

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学文学部教授　同大学大学院
社会学研究科委員　社会学博士
山岸　健

副査　慶應義塾大学文学部教授　同大学大学院
社会学研究科委員　社会学博士
大澤　英雄

副査　名古屋大学名誉教授　創価大学名誉教授
文学士　阿閉　吉男

内容の要旨

1．本研究の目的

1980年代以降，カール・マンハイムの業績に関する研究に新たな可能性が開けつつある。それはまず第一に，この時期から，従来知られていなかったマンハイムの論文や書評，草稿，学位論文，新聞などによせた論評，書簡，日記といった資料が発掘されはじめたことによる。また第二に，知識の文脈依存性に注目する近年の学問的動向（たとえば，T．クーン以降の科学史・科学哲学，新クーン学派の科学知識の社会学，H-G．ガダマーの哲学的解釈学，社会学理論における意味学派など）に対応して，同様のアイデアを早くから提出していたマンハイムの知識社会学に，あらためて関心が向けられていることによる。

本研究の目的は，まず第一に，上述の新資料を消化し，マンハイムの思想的展開のうちに位置づけていくこと，そして，それをつうじて，1910年代から1920年代半ばにいたるマンハイム知識社会学の形成過程を歴史的観点から再構成することにある。そして第二に，本研究の目的は，上述の近年の学問的動向をふまえつつ，1930年前後にほぼ完成されるマンハイム知識社会学の全体像を理論的観点から再構成することにある。

このような作業をつうじて，知識社会学という学問分野の出発点を再確認し，今後，知識社会学の現代における展開を考察するうえでの手がかりとすることが本研究の動機となっている。

2．本研究の構成

本研究の前半部分（第一章，第二章，第三章，第四章）では，マンハイム知識社会学の歴史的な形成過程をたどる。そのさい，知識社会学の展開を，近年発掘されたハンガリー時代の論文や書評など，また，ハイデルベルク時代の文化社会学草稿や学位論文を中心とする新資料をもちいて内在的に検討する。また同時に，マンハイムの生活したブダペストやハイデルベルクの精神的風景や社会的状況，あるいは，ワイマール期のドイツ社会学会の情勢など，理論の発展の背景となっている外在的要因にも必要に応じて焦点をあてていく。

本研究の後半部分（第五章，第六章）では，前半部分での検討をふまえて，また，マンハイムが知識社会学をほぼ完成させた1930年前後の資料を中心として，マンハイム知識社会学の全体像を理論的に再構成していく。そのさい，知識の存在拘束性という知識社会学のテーゼから帰結する認識論的問題（第五章），および，知識の存在拘束性というテーゼの具体的内容をしめす知識社会学の理論的構図（第六章）という二つの観点から再構成をおこなう。また，前述のような，解釈学や科学社会学など，近年の学問的動向との関連性についても，必要に応じて言及する。

3．各章の要旨

第一章では，まず，1910年代から1920年代初頭にかけての，ブダペストにおける青年マンハイムの思想の展開をあつかっている。まず前半では，当時のハンガリーの社会情勢や精神的環境を背景としつつ，マンハイムの生活の様子や学問的交流のありさまを概観している。そして，後半では，前半での概観をふまえつつ，マンハイムの当時の思想のうちに，「相対主義」，「神秘主義」，「動的思考」という三つの精神的傾向の緊張関係がみてとれることを論証している。また，さらに，ハンガリーからの亡命後に書かれた戯曲においては神秘主義的傾向が色濃くなっていることにも言及がなされる。

第二章では，1920年代前半の，ハイデルベルクにおけるマインハイムの基本的な精神的態度について論じている。マンハイムがハイデルベルクの精神的風景やハイデルベルク大学の学生について論じている新資料が紹介される。そして，当時の彼が，生活と学問の分離という事態を問題視していたこと，さらに，一方で狭い生活の枠のなかへの自閉や非合理的感情への沈潜，他方で硬直状態に陥った学問を批判的に観察していたことが明らかにされる。そのうえで，マンハイムの基本的な精神的態度が，生活と学問を媒介していくこと，さらにいえば，自らの立場を絶対化するような静的な態度ではなく，ら自

の立場を動態化し，そこからさまざまな精神的運動を動的に媒介していこうとする態度であったことが論じられる。このような態度は，「亡命者戦略」として特徴づけられる。

第三章では，1910年代後半から1920年代半ばにかけての，知識社会学の展開が，マンハイムの著作に内在しつつ理論的観点から再構成される。世界観解釈から文化社会学，さらには知識社会学へという理論的展開のなかで，世界観や体験連関という言葉で表現される知識のコンテクストが社会的にいかに多様に分化しているかという点に焦点があてられていくことが明らかにされる。また，知識社会学的分析の見本例としての保守主義論が，「知識社会学の知識社会学」とでもいうべき自己反省的性格を有するものであることも論証される。

第四章では，1920年代後半の知識社会学の理論的成熟と，そのひとつの背景となっているワイマール期のドイツ社会学会の動向との関係が明らかにされる。第六回ドイツ社会学会大会におけるマンハイムの報告とそれに対する討論が主たる資料として用いられる。そして，制度化が進む当時のドイツ社会学において，その学的基盤ともいうべき「価値自由」の原則が形骸化し，「自己正当化のための方便」となっていたこと，また，マンハイムの知識社会学のひとつの意図が，こうした状況自体を対象化し，価値自由という原則の再考を促すことにあったことが明らかにされる。

第五章では，1930年前後の知識社会学の完成期の諸著作を中心として，知識社会学が含みもつ認識論的問題，とりわけ，知識の存在拘束性というテーゼの自己言及により生じるとされる矛盾，いわゆる「マンハイムのパラドックス」に焦点があげられる。論証は，このパラドックスに関する批判が普遍的真理の存在を前提とする旧来の認識論に基づくものであること，むしろ，認識の相対化（相関化）を，同じく相対化（相関化）された立場からおこなうことがマンハイムの意図であることを明らかにしていく。そして，こうしたマンハイムの意図に即して，「相関主義」や「自由に浮動するインテリゲンチャ」という概念も理解されるべきであること，さらに，かの理解を前提とすれば，従来のマンハイム批判の多くが的外れのものであることが明らかにされる。

第六章では，前章と同じく1930年前後の知識社会学の完成期の諸著作を中心として，知識社会学の理論的構図が明らかにされる。まず，近年の，解釈学的な立場からのマンハイム解釈を整理した後，それが社会学的観点から補完されるべきものであることが論証される。そして，マンハイムの知識社会学の理論的構図を，彼の「競争論」と「世代論」を二つの軸として再構成することが試みられる。また，「イデオロギー」，「ユートピア」の概念に関する整理もなされる。

なお，巻末に，資料としてハンガリー科学アカデミー図書館所蔵の「ビアリッツの女」(1920) およびフランクフルト新聞掲載の「学問と青年」(1922) の翻訳，ならびに，「カール・マンハイム著作目録」が掲載されている。

審査要旨

澤井敦君の学位請求論文「マンハイム知識社会学の研究」は1980年代に新たに発掘されたカール・マンハイム（マンハイム・カーロイ）の諸資料の検討と考察をおこないながら，こうした諸資料をマンハイムの思想の展開と彼の業績のなかに位置づけ，マンハイムの知識社会学の形成過程を社会的背景，知的文化的状況，彼自身の生活史とのかかわりにおいて解明し，また，マンハイム知識社会学の諸相に注目しながら，マンハイム知識社会学の理論的理解をめざした研究である。

本論文の内容構成（目次）はつぎのとおりである。

序
第一章　ブダペストのカール・マンハイム
　　——相対主義，神秘主義，動的思考の狭間で——
1．はじめに
2．動乱のブダペストにて
3．相対主義・神秘主義・動的思考
4．ビアリッツの女
第二章　ハイデルベルクのカール・マンハイム
　　——亡命者戦略と歴史主義——
1．はじめに
2．ハイデルベルクからの手紙
3．亡命者戦略と歴史主義
第三章　世界観解釈・文化社会学・知識社会学
　　——知識社会学の形成過程——
1．はじめに
2．文化社会学の構想
3．保守主義論と知識社会学
第四章　知識社会学と価値自由の問題
　　——ワイマール期のドイツ社会学会とマンハイム——
1．はじめに
2．マンハイムにおける価値自由の問題

3．「競争」をめぐる討論
4．ワイマール期ドイツ社会学会の情勢
5．知識社会学と価値自由
第五章　マンハイムのパラドックス
——知識社会学の認識論的問題——
1．はじめに
2．「知識の存在拘束性」の再検討
3．マンハイムのパラドックス
4．相関主義と知識社会学
5．自由浮動性と責任倫理
第六章　知識・競争・世代
——知識社会学の理論的構図——
1．はじめに
2．解釈学と知識社会学
3．知識と競争
4．知識と世代
5．知識の政治性
資料（翻訳）
1．カール・マンハイム「ビアリッツの女——四場より成る劇——」(1920)
2．カール・マンハイム「学問と青年」(1922)
カール・マンハイム著作目録
文献リスト
初出一覧

〈本研究の目的・課題〉

1．1980年代以降，発掘され始めたマンハイムの論文，書評，草稿，学位論文，新聞などに寄稿した論評，書簡，日記といった諸資料の考察と活用をつうじて，マンハイムの思想的展開の状況を明らかにし，1910年代から1920年代なかばにいたるマンハイム知識社会学の形成過程を歴史的観点から再構成すること。
2．近年，知識の文脈依存性に注目する学問的動向が見られるが（クーン以降の科学史・科学哲学，社会学理論における意味学派など），こうした動向をふまえながら，1930年前後にほぼ完成されるマンハイム知識社会学の全体像を理論的観点から再構成すること。

カール・マンハイムの知識社会学の成立過程，成立の基盤と背景の考察，マンハイムの思想像の解明，知識社会学の出発点の確認，知識社会学の現代性と意義をめぐる考察——本論文においては，こうした事柄をめぐって研究がおこなわれている。

本論文はカール・マンハイムの思想と社会学の全体像，彼の社会理論あるいは社会学の全体像の解明と理解をめざした研究ではなく，知識社会学の成立過程，パースペクティヴ，構成原理の考察を主眼としたマンハイムへのアプローチであり，マンハイム研究である。

本研究は全六章からなるものであるが，第一章から第四章までの各章においては，マンハイム知識社会学の歴史的な形成過程をめぐって考察がおこなわれており，こうした各章においては，歴史主義指向の解釈が試みられている。また，第五章と第六章においては，マンハイム知識社会学の全体像の理論的な再構成がおこなわれており，こうした各章においては，現代中心主義指向の解釈が試みられている。

なお，各章についての初出はつぎのとおりである。

第一章　ブダペストのカール・マンハイム
——相対主義，神秘主義，動的思考の狭間で——
初出，同タイトル，秋田経済法科大学経済学部『経済学部紀要』第10号，1989年。

第二章　ハイデルベルクのカール・マンハイム
——亡命者戦略と歴史主義——
初出，タイトルは「ハイデルベルクのカール・マンハイム——『学問と青年』(1922) をめぐって——」同上『経済学部紀要』第9号，1988年。

第三章　世界観解釈・文化社会学・知識社会学
——知識社会学の形成過程——
初出，タイトルは「知識社会学の形成過程」，秋元律郎・澤井敦『マンハイム研究——危機の理論と知識社会学——』早稲田大学出版部，1992年，第二章。

第四章　知識社会学と価値自由の問題
——ワイマール期のドイツ社会学会とマンハイム——
初出，タイトルは「『存在拘束性』と『価値自由』——K．マンハイムの『競争論』をめぐって——」同上『経済学部紀要』第11号，1989年。

第五章　マンハイムのパラドックス
——知識社会学の認識論的問題——
初出，同タイトル，同上書『マンハイム研究——危機の理論と知識社会学——』第三章。

第六章　知識・競争・世代
——知識社会学の理論的構図——
初出，同タイトル，同書，第四章。

本論文は以上のように既発表の諸論文をもって構成された社会学説，社会学思想，社会学理論それぞれのパー

スペクティヴをふまえた研究である。

本論文，各章の内容

つぎに各章について若干，触れておきたい。

○第一章　ブダペストのカール・マンハイム
——相対主義，神秘主義，動的思考の狭間で——

この章においては，ハンガリーのブダペストに生まれたマンハイムの若き日の肖像と知的精神的思想的状況，彼の生活史の場面と様相，青年マンハイムが体験した知的精神的雰囲気，ブダペストの精神的風景，ハンガリーの政治情勢，歴史的な動乱の状態などについての紹介と考察がおこなわれている。

ブダペスト大学で学ぶマンハイム，ベルリン大学への留学，動乱のなかでのハンガリーへの帰国，マンハイムの生活史をたどりながら，彼の学習と研究の諸様相，マンハイムの研究活動，知的精神的活動などが明らかにされている。

新たに見いだされた資料や情報などをよりどころとしながら，マンハイムの思想的基盤と思想的背景，マンハイムの根底にあるものなどの解明と理解が試みられている。

マインハムの精神的態度，精神的傾向，問題意識，関心領域，パースペクティヴ，活動などに照明が投じられているが，ブダペストの精神的風土，精神的風景，知的なサークルなどの活動状態とのかかわりにおいてマンハイムの生活史がクローズ・アップされている。ベラ・バラージュの日記などが資料として用いられているところもある。マンハイムはベラ・バラージュやルカーチを中心とした「日曜サークル」に参加している。このサークルの活動状況と精神的背景が明らかにされている。また，このサークルと深いかかわりがある「精神科学自由学院」の実態が紹介されている。マンハイムの「魂と文化」は1918年2月から開かれた同学院の第二期における開講講義の役をになっていたところのものである。

1918年11月9日，マンハイムは「認識論の構造分析」によってブダペスト大学の哲学の博士号を取得している。1919年5月～6月にかけてマンハイムは同大学で「文化哲学の根本問題」と題された講義をおこなっている。この講義の最後の部分でマンハイムは「聖人」「政治家」「教育者」という三つの生活態度の類型を提示している。

本章において特に注目さるべきことは，相対主義，神秘主義，動向思考という三つの思想傾向に注目しながら，青年マンハイムの思想の考察が認められていることである。

1919年8月1日，誕生してからわずかに五カ月たらずでハンガリー，ソヴィエト共和国は崩壊する。この年の12月初旬，マンハイムは船でドナウ川をさかのぼり，ウィーンへ亡命する。そののちマンハイムはドイツ各地を転々とし，ブダペストを去ってから一年あまり後のことだが，ようやくハイデルベルクに落ち着く。

なお，本章においてはマンハイムの戯曲「ビアリッツの女」が紹介されている。登場人物は三人。ハイデルベルクに落ち着くまでの旅の途上で執筆された四つの場面からなるこの戯曲にマンハイムの心象風景を見ることができる。

○第二章　ハイデルベルクのカール・マンハイム
——亡命者戦略と歴史主義

「旅すること」を余儀なくされた思想家，社会学者マンハイム（沢井）はハイデルベルクでは移住者である。マックス・ヴェーバーは世を去っているが，彼の妻，マリアンネ・ヴェーバーのサロンにマンハイムはたびたび出席している。1920年のことだったが，マンハイムはハイデルベルクで「社会学とは何か」と題する私的なセミナーを開いている。ハイデルベルクでマンハイムはアルフレート・ヴェーバーのセミナーに姿を見せる。

この第二章においてはハイデルルベクの精神的風景についての紹介がおこなわれている。この章で注目されることは，ハンガリーの雑誌『炎』誌上に公開書簡のかたちで1921年，1922年と2回にわたって掲載されたマンハイムの「ハイデルベルクからの手紙」が資料として検討され，ハイデルベルクの精神的状況と諸事情についての考察がおこなわれていることである。ドイツ文化の脱中心性，小都市の雰囲気，二つの世界観の相克——M. ヴェーバーと S. ゲオルゲ（対立する二つの極）——などにマンハイムが注目し，こうした点について論評を加えている。また，この章においては1922年11月30日のフランクフルト新聞夕刊にマンハイムが寄稿した「学問と青年」の内容紹介がおこなわれている。青年の生活態度と大学体験についての論評といえるものだが，大学論と呼ぶこともできるような内容である。こうした論評や手紙の内容分析をつうじて，マンハイム自身の意図とパースペクティヴが明らかにされている。マンハイムの志向の根底にある精神的態度を表現する言葉として「亡命者戦略」（C. ローダーの表現）という言葉が用いられている。

本章においてはマンハイムが理解するところの歴史主

義の本質と意図について考察が試みられている。歴史の縦断面，横断面において把握された動的な，生活の総体性をふまえて，現時点での現実的な意欲・関心から，より包括的で総合的な哲学的ヴィジョンを生みだしていくことが歴史主義の意図するところなのである。(沢井，46 ページ)。

○第三章　世界観解釈・文化社会学・知識社会学
——知識社会学の形成過程——

本章においては主として1920年代前半の理論的著作をふまえて，マンハイム知識社会学の形成過程の解明が試みられいる。ドイツ語版の「認識論の構造分析」(1922年)（マンハイムがブダペスト大学に提出した博士論文を増補したものである)，近年，見いだされた文化社会学に関する二つの草稿（1922年，1924年)，「旧保守主義——知識の社会学への寄与——」(1925年)（これはマンハイムの私講師資格取得論文である）などの考察をつうじて，知識社会学の形成過程という視点からマンハイムへのアプローチがおこなわれている。

マンハイムの文化社会学，知識社会学に見いだされるパースペクティヴとして注目されるのは，精神的形象の背景となっている意味のコンテクストへのアプローチなのである。「認識論の構造分析」においてのことだが，さまざまな認識論にあらわれている思考の論理的形式にマンハイムが注目している。この作品は精神的形象の社会学的考察のための準備作業として理解されるものである。こうした形式の析出のためにマンハイムが注目したコンセプトが「体系」化というコンセプトである。

つぎに「世界観解釈の理論への寄与」(1921年-22年)。ここでは，上記の体系化に相当するコンセプトは「世界観総体性」というコンセプトである。「体系化」も「世界観総体性」も精神的形象が組み込まれている意味的連関に照準を合わせたコンセプトなのである。前者は時代・文化の相違を問わず，類型的にあらわれてくる普遍的構造であり，後者は文化によって異なり，歴史とともに変化するものである。後者はある文化を形成するさまざまな領域——造形芸術，音楽，風俗，服装，生活のテンポ，身ぶりなど——を貫通するより包括的な連関をさす。「世界観総体性」の特徴をより明確化するため，マンハイムは文化的形象の三つの「意味層」に注目している。客観的意味，志向された表現意味，ドキュメント的意味である。

文化社会学草稿だが，草稿1は「文化社会学的認識の特性について」(1922年9月から執筆されている)，草稿2は「文化とその認識可能性についての社会学理論（接続的思考と伝達的思考)」と題されている。体系化，世界観解釈の理論は「内在的，発生論的解釈」に属しているが，文化社会学においては「外在的，発生論的解釈」がおこなわれるのであり，社会学的な概念地平の焦点となるものは，マンハイムによれば「社会的体験連関」にほかならない。世界観とは共有された「社会的体験連関」を背景にして生じる共有された体験様式なのである。

本論文においては，マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」をめぐるマンハイムの理解もとりあげられている。

草稿2の特に第2部においては，知識社会学の中心的テーゼである「知識の存在拘束性」というコンセプトを支えるいわば社会学的存在論が詳細に論述されている。主観と客観を含み込んだ「存在的関係」こそ認識において原初的なものといえるのである。マンハイムはこうした「存在的関係」をヴァイゼッカーの術語を借りて，「接続的な経験空間」と呼ぶ。マンハイムはデュルケムのコンセプトである集合表象という言葉を用いているが，デュルケムそのままの意味でこの言葉を用いているわけではない。集合表象の内容は「精神的現実」と「概念」の二つに区分されている。制度，習慣，日常的言語，偶像，道具，衣服，建造物，こうした意味を附与され変形された事物，製作物，山や川といった外界の自然，性愛，死と誕生，こうした事柄が「精神的現実」として理解されている。「概念」とは「精神的現実」に関する意識的な反省の所産をさす。

マンハイムが見るところでは，文化社会学は「精神的現実」を経験空間との関係において考察するのであり，知識社会学は「概念」を経験空間との関係において考察するのである。本章においては文化社会学草稿1，2の紹介，検討，考察がおこなわれているが，マンハイムの知識社会学やマンハイムの方法に関するガダマーの評価やガーフィンケルの見解もとりあげられている。また，マックス・ヴェーバーの理解社会学についてのマンハイムの批判に言及したところもある。

保守主義論と知識社会学，これは本論文の注目さるべきひとつのパースペクティヴである。「知識社会学問題」(1925年）においてはシェーラーに代表される従来の知識社会学が批判されている。理念史的方法と社会学的方法の結合がこの論文において意図されている。マンハイムは「精神的諸層」(ある特定の世界観によって拘束された一群の人びとをさす）に注目している。

ハイデルベルク大学哲学部に提出されたマンハイムの

私講師資格取得論文「旧保守主義――知識の社会学への寄与――」(審査の最終的手続きの終了は1926年6月)は19世紀前半のドイツにおける保守主義的思考に関する研究である。個々の思考の背後にある意味的連関，文化社会学草稿1，2に見られる言葉を用いるならば，「社会的体験連関」「接続的な経験空間」の特徴の把握が意図されたのである。伝統主想，また，自由主義的・進歩主義的思考との対比において保守主義，保守主義的思考の特徴についての理解が試みられている。

マンハイムには「保守主義的思考」(1927年)と題された作品もある。本論文においては三つの保守主義論の構成について考察がおこなわれている(表1　三つの保守主義論の構成，69ページ，旧保守主義　知識の社会学への寄与(1925年)／保守主義的思考　ドイツにおける政治的歴史的思考の生成についての社会学的考察(1927年)／保守主義的思考(1953年))。マンハイムにおいては保守主義的思考の「意味分析」において析出されるのは，こうした思考の背後にある「思考様式」と「基礎志向」(特定の思考の背後にある「世界観」に見られる一定の方向性)である。「思考様式」とは特定の「基礎志向」を背景としてある一群の人びとに共有された思考の枠組みを意味する。芸術においてゴシック様式，バロック様式という表現が用いられてきたが，マンハイムは思考の領域においてもこうした一定の統一性が見いだされるものと考えるのである。マンハイムは保守主義的思考の背後にある「基礎志向」のメルクマールともいうべきものを列挙している。旧保守主義についての考察においては，さまざまな思考の潮流を統合するものとして重視さるべき八項目にわたる「思考の場」(さまざまな思考の潮流を結合している結節点)がさし示されている。

マンハイムの志向の基底にあるのは「亡命者戦略」だが，マンハイムの議論には知識社会学自体の精神的背景，歴史的・社会的背景をつねに問いかえしていくという態度が一貫して見られるのである。本論文においては知識社会学の知識社会学が独自のパースペクティヴとなっている。マンハイム思想の中心的概念は，動的思考，総合，存在拘束的思考なのである。

○第四章　知識社会学と価値自由の問題
――ワイマール期のドイツ社会学会とマンハイム――

1928年9月，スイスのチューリッヒで第6回ドイツ社会学会が開かれたが，この大会においてマンハイムは「精神的なるものの領域における競争の意義」というタイトルで報告をおこなっている。その前後のマンハイムの歩みを見ると，「世代の問題」(1928年)，『イデオロギーとユートピア』(1929年)，「知識社会学」(1931年)などが執筆されている。

本章においては価値自由が重要なパースペクティヴとなっている。マンハイムはこの報告のなかで価値自由の問題に焦点をあてて見解を表明している。彼は世界解釈としての自由主義，保守主義，社会主義をとりあげ，こうした問題にたいして示されたそれぞれの主義の態度のとり方の相違を明らかにしている。こうしたそれぞれの主義にそくして三つの価値自由が理解されたのである。こうした価値自由をめぐる考察においては，知識の「存在拘束性」が一つの視点となっている。マンハイムの大会報告をめぐって表明されたさまざまな人びとのコメントが紹介されている。コメントを述べた一人であるヴィルブラントにマンハイムがたまたま語った言葉が紹介されている。「自分にはマルクスの影響をうけているところがあるが，それはディルタイの精神と結びついている」。(マンハイム)

1909年に創立されたドイツ社会学会のワイマール期の情勢が本論文において論じられている。価値自由はさまざまな立場(たとえば「関係論」や「マルクス主義的社会学」の立場)において重点的にとりあげられていたのである。さきのマンハイムの報告においては知識社会学と価値自由がひとつの論点となっていたのである。マンハイムは「価値自由」の公準の発見をめざしている。彼はみずからが意図するアプローチを知識社会学による「綜合的な状況分析」と呼んでいる。

フランクフルトへ向かったマンハイム，1930年4月1日，彼はエリアスを伴って，フランクフルト大学に着任している。

○第五章　マンハイムのパラドックス
――知識社会学の認識論的問題――

「知識の存在拘束性」についてマンハイム自身がどのような一貫したイメージを抱いていたか，こうしたことが本章においてのひとつの中心的論点である。「存在」の概念，「拘束性」の概念，「知識」の範囲，こうした順序で検討と考察がおこなわれている。

マンハイムにおいては知識と社会的存在(具体的な歴史的・社会的集団)のあいだに，「意味的存在」ともいえる媒介項がさしはさまれているのである。マンハイムの知識社会学においては，具体的な個々の知識や認識は，まず「視座構造」，さらには「世界解釈」という二つのレベルの「意味的存在」に関係づけられるのであり，こうした「意味的存在」を媒介項として，具体的な

個々の知識や認識は，さらに「社会的存在」に関係づけられることになる（118ページ　119ページ）。「視座構造」（「知識社会学」（1931年）において初めて用いられた言葉）とは，「思考様式」とほぼ同義であり，思考の枠組みを意味する。「世界解釈」とは，「世界観総体性」とほぼ同義であり，さまざまな事象からなる世界を秩序づける，社会的に共有された解釈の枠組みをさす。

「知識の存在拘束性」というテーゼにおいて「存在」とは，「視座構造」および「世界解釈」という二つのレベルの「意味的存在」ならびに具体的な社会的集団をさす「社会的存在」を包括する概念である。「拘束性」とは，あくまでもある時代のある社会において見られる知識と存在のあいだの親和性，具体的な「対応」関係を意味する概念である。ある知識をある存在へと関連づける手つづきは帰属と呼ばれる。意味的帰属と社会学的帰属とが区別される。「知識」の範囲にかかわる考察においては，現代社会学のさまざまなパースペクティヴ（たとえばバーガーとルックマンの場合，リアリティ構成論など）についての言及も見られる。日常的知識と科学的知識がひとつのパースペクティヴとなっている。

マンハイムのパラドックス，それは，「知識は存在拘束的＝相対的である」という主張（＝知識）自体が普遍的妥当性を有する真理として主張されている，というパラドックスである。こうしたパラドックスをめぐる議論がとりあげられている。

マンハイム思想の進展，時代的にそれをたどると，「内在的領域の隔離」「真理としての歴史」「自己相対化の徹底」という流れが指摘されるのである。

『イデオロギーとユートピア』（1929年）に見られるマンハイムの見解だが，知識社会学は「全体的・普遍的なイデオロギー」と呼ばれる立場をとるものとして，他のイデオロギー論から区別されるのである。

マンハイムの議論は今日の相対主義をめぐる議論を先取りするものといえるのである。本論文においては現代社会学や現代の学問研究の諸動向に注目しながら，マンハイム知識社会学の構図や意義，彼のアプローチとパースペクティヴを理解したり，評価したりしようとつとめる研究者の態度がうかがわれるのである。

また，本章においては，相関主義と知識社会学がひとつのパースペクティヴとなっている。相関主義とは知識や認識に限らず，意味をになうあらゆる要素がそもそも有意味なものとなりうるのは，特定の意味的・社会的存在との関係性のうちにおいてのみであるとする立場である。価値自由な立場，評価的な立場，こうした立場と相関主義にかかわる考察が本論文においてくりひろげられている。

さらに自由浮動性と責任倫理，社会的に自由に浮動するインテリゲンチャ，知識人，教養文化などが主題的にとりあげられており，マンハイム知識社会学のアプローチとパースペクティヴ，射程，構成原理，構図，中心的論点，現代性，現代的意義などが論じられている。知識人と政治，学問と政治――マンハイムはマックス・ヴェーバーと向き合っている。

○第六章　知識・競争・世代

――知識社会学の理論的構図――

マンハイムに関する先行研究については本論文の冒頭部分でその状況が明らかにされているが，この章の初めの部分においては，従来のマンハイム解釈についてのB．ロングハーストの見解が示されている。三つの解釈が見られたのである。(1)主として社会学者による解釈――「マルクス主義者としてのマンハイム」(2)主としてマルクス主義者による解釈――「社会学者としてのマンハイム」(3)解釈学者としてのマンハイム，という解釈。

マンハイム知識社会学の理論的構図をマンハイム自身の著述から逸脱することなく，その可能性をくみとるかたちで再構成することが本章の目標なのである。

解釈学と知識社会学というパースペクティヴでマンハイムへのアプローチが試みられている。サイモンズ，ヘクマンそれぞれの見解が示されている。ヘクマンはマンハイムの知識社会学とガダマーの解釈学の類似性を強調している。

本論文をつうじて，解釈学はひとつのパースペクティヴとなっている。1929年4月12日付のエードゥアルト・シュプランガーあてのマンハイムの手紙が本論文において紹介されている（『イデオロギーとユートピア』発刊の十日ほど前に書かれた手紙である）。この手紙から明らかになることだが，マンハイムの意図は精神的視座，いいかえれば解釈学的視座を社学的観点から補完することだったのである。知識社会学が知識の「解釈学」ではなく，知識の「社会学」でなければならない理由はこの点に見いだされるのである。この手紙のなかでマンハイムは「社会学的要因」に言及している。彼のパースペクティヴにおいては，知識や認識を制約する社会学的要因としては，階級，世代，生活圏，宗派，職業集団，学派などが列挙されている。こうした要因として特にはっきりとクロース・アップされてきたのは，「競争」と「世代」にほかならない。「競争論」は共時的なレベルに重点をおいた存在拘束性の動態と多様性にかかわる議論であ

り，「世代論」は通時的なレベルに重点をおいた同様の議論なのである。

知識と競争が本章においてひとつのパースペクティヴとなっている。ここでふたたびチューリッヒにおける第6回ドイツ社会学会におけるマンハイムの報告「精神的なるものの領域における競争の意義」がとりあげられている。いくつかの世界解釈（具体的な知識や思考の背景をなす経験・体験の図式，さまざまな事象からなる世界を秩序づける解釈の枠組み）はたがいに競争し合っているが，競争において共通の目標となっているのは何か，マンハイムはこうした問に直面している。彼はそうした目標となっているものを「存在の公的解釈」（ハイデッガーの言葉である）と呼ぶ。いくつかの世界解釈はみずからを「存在の公的解釈」たらしめるために，他の世界解釈とたがいに競争するのである。こうした世界解釈はいくつかの具体的集団によってになわれているが，こうした場面においては，権力への志向がうかがわれるのである。本論文においては，競争論の構図が図示されている。(178ページ，第六章図1)。世界解釈は競争関係にあるのだが，世界解釈は根底の同じレベルにある精神的潮流／具体的集団と相互的な関係を取り結んでおり，最上層に姿を見せる具体的知識は世界解釈と同じく相互的な関係を取り結んでいるのである。世界解釈は精神的潮流／具体的集団と具体的知識を媒介するような中間的な位置を占めているのである。こうしたところでマンハイムの「総合とは選択を意味する」という言葉が紹介されている。

本章においては知識と世代が注目さるべきひとつのパースペクティヴとなっている。世代は文化の駆動原理として理解されている。マンハイムには「世代の問題」(1928年) と題された作品がある。世代はマンハイム理解のひとつの視点となるのである。本章においては世代論の構図が図示されている (188ページ，第六章 図2)。本章においては，世代，加齢，時代という視点から世代へのアプローチが試みられている。また，世代状態，世代連関，世代統一，こうしたそれぞれのパースペクティヴが潮流や具体的集団の理解にあたって文脈をかたちづくっているのである。

本章においては知識の政治性をめぐって考察がくりひろげられている。また，イデオロギー，ユートピア，権力というパースクティヴで本研究の最終部分の考察が試みられている。マンハイムにおいてはイデオロギーとユートピアという概念は価値自由な立場からも，評価的な立場からも語られるのであり，こうした立場の違いに応じて，こうした概念にはおのずから相違が見られるのである。こうした立場の違いに応じたいずれの概念も，ある特定の視座構造，あるいは世界解釈をある一定の視角から特徴づけることを意図するものなのである。マンハイムの視野にはやがて拡大された視野から現代の状況を包括的に評価する学問，いいかえればマンハイムのいう「社会学的な時代診断学」が入ってくるのである。本章の末尾においてはイギリス亡命後のマンハイムの姿が展望されている。知識社会学以降，マンハイムは時代の診断に立ち向かうことになる。

第六章において「政治的なるもの」に言及しているところがあるが，マンハイムの場合，「政治的なるもの」は，個々の知識，さらに個々の世界解釈を特徴づけるうえでの「方向づけの中心」としての位置を占めているのであり，「政治的なるもの」は，個々の世界解釈の本質を特徴づける際の準拠点となるのである。

マンハイム知識社会学は価値自由という主題によって貫かれているということもできるのである。

本論文の研究成果と特徴，意義

つぎに本論文において注目さるべき研究成果と本論文の特徴について述べる。本論文の特徴，意義として，はじめにつぎの二点が指摘される。

(1) 時代的には主としてマンハイムのハンガリー時代からハイデルベルク時代にわたるところの比較的初期の資料だが，1980年代以降，新たに発見されたカール・マンハイムの論文，書評，草稿，学位論文，新聞の論評，戯曲，書簡，日記などの資料を可能な限り活用，考察しながら，ブダペストやハイデルベルクの精神的雰囲気や社会的状況，歴史的な場面，さらにワイマール期のドイツ社会学会の情勢，こうした背景を考慮しながら，また，マンハイム自身の生活史をふまえて，初期マンハイムの思想形成過程とマンハイム知識社会学の生成過程を綿密に跡づけ，考察したこと。

(2) これまで，とりわけわが国では，マンハイムの知識社会学は，マルクス主義と関連づけられながら理解され，批判的否定的に解釈されることが少なくなかった。だが，現代の学問的動向を見ると（たとえば，ガダマーの哲学的解釈学，解釈学的社会学，クーン以降の科学論や科学社会学など），そうした諸動向にはマンハイムのパースペクティヴとの親近性が見いだされる。本論文では，従来，批判の的となることの多かった「相関主義」や「自由に浮動する

インテリゲンチャ」といった概念，あるいは「知識の存在拘束性」というテーゼの具体的内容を現代の学問的動味をふまえたうえで，そうした概念やテーゼの可能性を汲み取るかたちで理論的に再構成することが試みられている。

以上のうち(1)は本論文の第一，二，三，四章においての成果であり，(2)は第五，六章に見られる成果である。

つぎに各章の注目さるべきポイントと研究成果に触れる。

○第一章

これまでは，ハンガリー時代のマンハイムという場合，「魂と文化」(1918年) が知られていただけだった。この作品にはジンメルにつながる問題意識が見られたが(文化の悲劇)，この作品の内容から楽観的な思想家というマンハイム像が描かれていた。本章においては新たに見いだされた各種の資料，文献をよりどころとしながら，また，マンハイムの生活史やハンガリー事情，ブダペストの知的精神的雰囲気などとのかかわりにおいて，この時期のマンハイムの思想を単なる楽観主義としてではなく，「相対主義」，「神秘主義」，「動的思考」という三つの思想傾向の葛藤のうちにあるものとして考察し，理解している。

○第二章

新たに見いだされた「ハイデルベルクからの手紙」(1921年，1922年)，「学問と青年」(1922年) をよりどころとしながら，ハイデルベルクの精神的雰囲気，マンハイムの生活史的状況，彼の問題意識とパースペクティヴが描き出されている。マンハイムはハイデルベルクの精神的雰囲気を S. ゲオルゲと M. ヴェーバーの両極的対立に象徴される生と学問の対立のうちにとらえていた。彼はこうした対立を複眼的な視点から考察し，おのおのに内在する問題点を批判しながら，両サイドを媒介しようとしたのである。ここに「亡命者戦略」と呼ぶことができるような精神的態度が見られる。マンハイム理解にあたっては，ハイデルベルクの精神的雰囲気と密着したこうした精神的態度が注目されるのである。

○第三章

これまで知られていなかった文化社会学に関する二つの草稿 (1922年，1924年)，そしてマンハイムのハイデルベルク大学私講師資格取得論文「旧保守主義」(1925年) に注目しながら，世界観解釈から文化社会学，さらに文化社会学から知識社会学へといたるマンハイムの思想展開の諸様相と過程が解明されている。そうした過程において理論的図式においても，認識論的見解においても，社会学的な視点が徐々に前面に押し出されてくる有様が明らかにされている。「旧保守主義」の検討においては，具体的な研究事例にそくして，知識社会学の分析が「意味分析」と「歴史的・社会学的分析」という二段がまえのものであることが，示されている。また，「旧保守主義」という研究そのものが，「知識社会学の知識社会学」と呼びうるような自己反省的性格を有するものであることが明らかにされたのである。

○第四章

第6回ドイツ社会学会 (1928年) におけるマンハイムの報告，それをめぐる討論に注目しながら，「価値自由」という言葉を軸としてマンハイムの知識社会学の方向性と当時のドイツ社会学会の情勢の関連性が明らかにされている。相対立するグループが見られたが (関係論のグループとマルクス主義的社会学のグループ)，マンハイムの知識社会学の一つの意図は，こうしたグループのいずれかに与するのではなく，むしろ総合的な状況分析をおこない，それをつうじて，より深いレベルで「価値自由の意味を問い直すことにあったのである。

○第五章

これまでマンハイムの知識社会学にたいする最も一般的な批判として，「マンハイムのパラドックス」(知識の存在拘束性というその中心的テーゼ自体が存在拘束的＝相対的なものであることになるという矛盾) がくりかえして語られてきた。マンハイム自身はかなり初期の時点から，こうしたパラドックスをはっきりと意識しており，それを問題視していたのである。結果的には，相対主義を相対主義的にたてるという現代の科学論，科学社会学に見られる立場にマンハイムが到達していたことが明らかにされている。こうして「相関主義」という立場が構築されること，そして「自由に浮動するインテリゲンチャ」という概念も知識人の現状を肯定するものではなく，むしろ，相関主義の延長線上で，知識人のあるべき姿を示す規範的要請であることが，強調されたのである。

○第六章

知識社会学の中心的テーゼ「知識の存在拘束性」については，これまでその内容の不明確さがしばしば指摘されてきたが，本章においては，解釈学的なパースペクティヴでのマンハイム解釈などを視野に入れたうえで，競争，世代といったそれぞれの視点から，意味のコンテクストの社会学的な多様化の様相が明らかにされている。「知識の存在拘束性」というテーゼの核心はこうした意味のコンテクストの社会的分化，社会学的な多様化の様

相を示すことにあるのである。イデオロギーとユートピアについても新たな研究動向をふまえて，独自の考察が試みられている。

本論文においては，新たに発見，発掘された各種の資料，文献を綿密に検討し，考察することによって，これまでのマンハイム研究においてはほとんど視野に入らなかったようなマンハイムの生活史，人間像，彼の諸活動と歩み，彼のパースペクティヴとアプローチが解明されており，また，ブダペストおよびハイデルベルクの精神的風景と諸事情が明るみに出されている。マンハイム知識社会学の生成と形成の過程，諸様相，背景が新たに見いだされた資料，文献とマンハイムの諸業績をふまえて明らかにされている点に本論文の独自性と意義がうかがわれる。

これまでのマンハイム研究，マンハイム知識社会学の研究，さらに社会学史，社会学思想，理論社会学，こうした諸分野の研究，ドイツ社会学の研究，文化社会学，知識社会学の諸領域における研究において，新境地を開拓し，新たな展望をもたらす研究として，本研究の意義を高く評価したい。

マンハイム研究においては学際的な視野とアプローチが求められるが，本論文においては，こうした点において，可能な限りの努力がはらわれているものと考えられる。

本論文においてはマンハイムの若き日の肖像が描き出されており，マンハイムの根底と彼の持続的なパースペクティヴに照明が投じられている。彼の知識社会学の全体像と構成原理について検討と考察が試みられており，今日の学問的諸潮流とのかかわりにおいてマンハイム知識社会学の現代的意義と射程，パースペクティヴについての考察が深められている。

なお，本論文に見られる研究成果のなかで以上のほかに特につぎのような諸点に注目したい。たとえば，文化社会学，知識社会学，それぞれのアプローチとパースペクティヴの解明。価値自由問題の諸様相の考察，知識社会学における価値自由問題の位置と意義をめぐる考察。保守主義的思想の諸様態，パースペクティヴとしての保守的思考へのアプローチ。ドイツ社会学会へのアプローチ。知識の文脈依存性とマンハイム知識社会学へのアプローチ。解釈学と知識社会学に着眼する視点。政治思想，政治的なるものへのアプローチ。マックス・ヴェーバーへのアプローチ，マンハイムのマックス・ヴェーバー理解。

本論文の問題点，今後の指針

本論文はマンハイム研究として綿密な事例研究であり，研究態度と研究成果に注目したい。マンハイムの知識社会学を主題とした本論文は，今後のマンハイム研究，ドイツ社会学研究にあたって，重要な道標となる意義深い研究だが，つぎにいくつかの問題点と要望，今後の研究にあたっての若干の指針について述べたい。

本論文においては貴重な資料や文献について周到な検討と綿密な考察が試みられており，注目さるべき知見が数多く見いだされるが，機会が得られならば，もう少しマンハイムと距離をとりながら，つぎのような主題をめぐって考察を深め，マンハイム知識社会学，マンハイムの社会学，それぞれのパースペクティヴにおける研究をさらに深めていくことが望まれる。つぎの各主題，各事項については，本論文においてすでに考察がおこなわれているものもあり，言及されている場合もあるが，本論文が「カール・マンハイム研究」に発展するにあたっては，こうしたさまざまな主題／事項は有力な視点とパースペクティヴとなるものと考えられる。

○生活史と人間　マンハイムに見られる思想形成とパースペクティヴ
○亡命者の日常的世界　マンハイムのアプローチと問題意識
○マンハイムの社会学と知識社会学
○マンハイムにおける哲学，思想と社会学，知識社会学
○マンハイム知識社会学のパースペクティヴと諸相　精神／認識／思考／知識
○価値自由問題の展開とマンハイムの知識社会学
○政治思想とマンハイムのパースペクティヴ
○知識社会学のパースペクティヴと射程　マックス・シェーラーとマンハイム
○パースペクティヴとしての体験　マンハイムの視点
○パースペクティヴをめぐって　マンハイムの視座
○知識の文脈依存性をめぐって　マンハイム知識社会学と現代の諸潮流
○解釈学と社会学　マンハイムを手がかりとして
○ディルタイのパースペクティヴとマンハイムのアプローチ
○マンハイムとマルクス主義
○マンハイム，マルクス，ディルタイ
○マンハイムとマックス・ヴェーバー
○マンハイムとジンメル
○マンハイムとルカーチ

○マンハイムにおける人間の理解，社会の理解
○マンハイムに見られる文化の理解，知識の理解

本論文を構成している第一章から第六章までの各章それぞれのあいだには緊密な結びつきが見られ，論文全体としての統一性と方向性には確かなものが見られるが，こうした各章のあとに，できうるならば，本論文の全体を展望するような章があと一，二章ほしいというのが率直な感想である。本論文はみごとに完結した状態で完成されているが，こまかなことを述べるならば，つぎのような事項と諸点については，さらなる考察と理解が望まれるのではないかと思われる。たとえば，マンハイムの知識社会学をどのように批判的に評価するか。マンハイム社会学のなかに彼の知識社会学はどのように位置づけられるのか。マンハイムは社会学をどのように理解しているのか。亡命者であることの自覚とマンハイムの態度，パースペクティヴ。マンハイムにおける哲学，思想と社会学の関連性。

本論文の流れと文脈にそくしていうならば，マルクス，ディルタイ，マックス・シェーラーのそれぞれについては，緻密な考察と綿密なアプローチが要望される。マックス・シェーラーの知識社会学をマンハイムはどのように理解して，どのように批判しているのか。マンハイムはマルクスをどのように見ているのか。また，マンハイムはディルタイをどのように理解しているのか。こうした点については，この論文のなかで注意深い考察が求められる。

数々の貴重な資料や文献に接し得た喜びと感激が本論文を手にする人びとに伝わってくることだろう。本論文が，こうした資料や文献によって支えられていることはいうまでもない。こうした資料などの紹介，資料の読解という色彩が強いところもあり，資料の背景や文脈，マンハイムの見解，こうした点においてさらなる理解と慎重な考察が望まれるところも本論文には見られる。資料についての報告，紹介といったページがある。研究者の深い思考の展開が求められるところがあるし，説明不足の点が見られる。

視点のとり方によっては本論文についてさまざまな批判が呈示されるだろう。本論文にたいする厳しい批判だが，知識社会学を主題とした論文であるならば，当然，知識社会学のパースペクティヴと本旨にのっとった研究と考察の手順と方法が期待されるはずだが，そうした期待が大きく打ち破られてしまうといわざるを得ないようなところが，本論文には少なからず見られるのである。

知識社会学的なアプローチの欠如，考察と論述にあたって慎重な配慮の欠如，説明不足が見られるところが指摘される。見方によっては，本研究はマンハイム研究と呼び得るようなかたちを見せている。論文の全体構想の把握が困難なところがある。つぎのような批判が示される。知り得たものをすべて記述したと思われるほどに，その全体の構想が不透明で読み取りにくい。

さらにつぎのような批判が呈示される。マンハイムがいかなる状況のなかでいかに考えたかを問うときに，彼が考えたものを先取りし，それを逆に前提にして論を立てることが，繰り返されている。未知なるものへと向かう問いが，その結果としての答えを既得の知識のなかに求め，それを根拠に論理を展開する。そこには発見は見られず，説明と解釈とが発見に取って代わっている。

マンハイムの知識社会学の基本的課題として理解されることだが，特定の思考対象の選択という恣意性，思考対象と思考する自己との関係的状況の切断という恣意性——こうした二重の恣意性から相対的に自由である立場をマンハイムは構築しようとしているのである。本論文にかかわる疑点だが，こうしたことをふまえて，マンハイムがその課題をいかに解こうとしたかを一つ一つの文献に即して，著作の文脈に即して，それらを彼の思考内在的に後づける作業がなされるべきではなかったかと考えられる。こうした批判が示されるのである。

そしてつぎのような批判が呈示される。知識社会学ということになると，当然，思考の展開過程が注目されるのだが，本論文においては，多くの人びとの著作が引用されてはいるものの，そうした人びとの思考の道程を一つ一つ辿ることはなされていない。彼らの辿り着いた結論が，思考過程を経ることなく，思考過程から切り離された状態で引用されているにすぎない。研究者の誰もが先の二重の恣意性の問題に常に晒されていることを自覚することなしには，知識社会学は存在し得ないのである。本論文の研究者は知識社会学を主題として研究を進めていながら，知識社会学の場から身を引き，知識社会学を見失っているという批判が示されるのである。

以上のように本論文にはさまざまな問題点，疑問点，要望事項などが見られるが，カール・マンハイムの業績へのアプローチと言う点において，本論文が注目さるべき知見を含んだ労作であることは明らかであり，社会学博士の学位の授与に値する研究であることを認めたいと

思う。

教育学博士

第　　号　鹿毛雅治

内発的動機づけに及ぼす教育評価の効果

〔論文審査担当者〕

主査　早稲田大学教育学部教授　同大学院教育学研究科委員　元慶應義塾大学大学院社会学研究科委員　教育学博士　並木　博

副査　日本女子大学学長　同大学家政学部教授　同大学院家政学研究科委員　教育学博士　宮本美沙子

副査　慶應義塾大学新聞研究所教授　同大学院社会学研究科委員　文学博士　萩原　滋

内容の要旨

本論文の目的は以下の3つである。第1に，内発的動機づけの概念を明らかにすることとその教育的な意義を検討することである。第2に，教育評価が内発的動機づけに及ぼす心理学的メカニズムを明らかにするとともに，内発的動機づけの規定因としての教育評価の質について実験的に検討することである。第3に，どのような教育評価のあり方が内発的動機づけを保障するのかについて教育実践の観点から考察することである。第1章では以上の目的について述べた上で，本論文の構成と計画を示した。

第1の目的に関して，本研究では主に第2章で扱った。第2章では，内発的動機づけの研究史を概観することによって内発的動機づけの概念を明確化し，動機づけの1つの「現象」として内発的動機づけを記述するという観点から定義を行った。すなわち，内発的動機づけとは，「自己目的的な学習の生起・維持過程」であり，「熟達指向性」と「自律性」という2つの性質を合わせ持つものであるとした。そして，内発的動機づけ概念の教育的意義は，人が学ぶという行為の背後にある動機づけの本質を指摘していることにあり，内発的動機づけ研究の教育的意義は，人が学ぶという行為を保障するような教育環境とはいかなるものであるかについて，実証的に明らかにすることにあるとした。

第2の目的に関して，本研究ではまず，第3章において，教育評価をめぐる諸問題について検討した上で，教育評価と内発的動機づけの関連についての先行研究のレヴューを行い，教育評価が内発的動機づけに及ぼす心理学的メカニズムを提案するとともに，8つの仮説を提出した。本研究では，心理学的メカニズムとして，教育評価の2つの機能，すなわち，制御的機能（教育評価が，評価状況の設定を通して，学習者に圧迫感や緊張などの強制感を感知させ，内発的動機づけを低める機能）及び情報的機能（教育評価が，学習の遂行に関する情報を提供することを通して，学習者に有能感を感知させ，内発的動機づけを高める機能）を提示した。第4章では，このメカニズムと8つの仮説を検証するため，5つの実験的検討を行い，それぞれ考察を行った。実験1では，成績教示の効果を個人内要因の実験計画によって検討したが，「成績教示のような評価教示は制御的機能を持つ」（仮説1）は支持されなかった。実験2では，実験1の問題点を改善し，個人間要因の実験計画によって，成績教示と確認教示の効果を検討した。その結果，仮説1及び「確認教示のような学習内容に焦点を当てることを促す教示は情報的機能を持つ」（仮説2）が支持された。実験3では，評価方法としての相対評価，到達度評価，自己評価の効果を検討した。その結果，「相対評価は制御的機能を持つ」（仮説7），「到達度評価は情報的機能を持つ」（仮説8）及び「到達度基準のように学習内容に焦点が当てられている評価方法において，他者評価は情報的機能を持つ」（仮説4）が支持された。実験4と実験5では，実験3の問題点を踏まえ，評価主体の要因と評価基準の要因を独立に扱い，評価方法の効果について検討した。実験4では，評価主体（自己評価・他者評価）×評価基準（相対評価・個人内評価）の実験計画によって検討した。その結果，「一般に，評価方法としての他者評価は制御的機能を持つ」（仮説3）が支持される一方で，「一般に，評価方法としての自己評価は情報的機能を持つ」（仮説5）と仮説7は支持されなかった。実験5では，評価基準（到達度評価・統制）×評価主体（教師評価・自己評価）の実験計画によって検討した。その結果，仮説4，「自己評価が学習内容に関するフィードバック機能をともなう場合，特に情報的機能を持つ」（仮説6），仮説8が支持された。なお，5つの実験的検討を通して，本研究で提示した心理学的メカニズムの妥当性が確認された。

第3の目的に関しては，第4章における8つの仮説の検証及びATIパラダイムによる検討を通して，具体的な評価のあり方が内発的動機づけに及ぼす効果について考察した。その結果，学習が外的に強制されるものとし